



昭和52年(1977年)
12月号(No. 390)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 150円

目次

合同登山の可能性をさぐる	
——中国登山界と初の接触——	
(西堀栄三郎) ……………	(1)
中国登山界の沿革と現状(上)	
(片山全平) ……………	(2)
K2登山を終えて(広島三朗) ……………	(3)
インド隊カンチェンジュンガ登頂	
……………	(4)
自然保護情報	
原生林の北沢峠は守れるか	
(市川一雄) ……………	(5)
自然保護委員会東京集会	
(織内信彦) ……………	(5)
自然保護委員会丹沢集会に参加して	
(高橋亭夫) ……………	(6)
図書紹介 ……………	(6)
旅の山菜	
アルプス事典	
飛翔	
ルーム募金の報告とお願い ……………	(7)
報告とお知らせ ……………	(8)
図書受入報告(3) ……………	(8)
復活・新入会員 ……………	(11)
カット/松本慎太郎・谷アユ子	

合同登山の可能性をさぐる

——中国登山界と初の接触——

西堀栄三郎

日本スポーツ界の各代表で組織した日本体育友好代表団の一員として、十月二十七日から十一月八日まで中国を訪問する機会を得、同国のスポーツ界の総元締である

中華全国体育総会との友好を深めてまいりました。これは日中文化交流協会のお世話によるもので、王震副首相、廖承志氏らと親しく歓談、また私は日本山岳会の代表



史占春氏/撮影・西堀会長

者という立場から、異例ともいえる中国登山界の代表者と一夜の懇談会を持つことができたなど、短期間ながら非常に有意義な旅を続けることができ、会報を通じて報告いたします。

中国へは初めての旅でした。十月二十七日夕刻、雨の北京空港に到着、市内にいたる一本道の街路樹のなかを走ったわけですが、近代的な装いをこらし、市内に入るのと自転車の往来も激しく、「ここが中国だ」という第一印象を受けました。

翌二十八日毛沢東首脳記念堂に参拝、白い大理石の毛首席の像、その裏手には遺体安置場があり、地方からの参拝者はいまなおとを絶えず嗚咽すら聞かれ、その偉大さが思ばれた。ついで故宮参観と足を伸ばし、三十日は万里長城に案内された。ここに立つてつくづく思ったことは、「中国人はこういうものを作ろうと思えば、い

て、仙人でもあしらは、などと思ったりもした。四日は広州にとび、中山記念堂でパレードを観賞、広州交易会から、つぎに上海に回って八日帰国したというわけである。

スポーツ関係者と会ったのは十二月二十九日玉猛国家体育運動委員会主任(関係にあたる)、ついで登山関係者に会ったのが十月三十日夜、北京飯店であった。

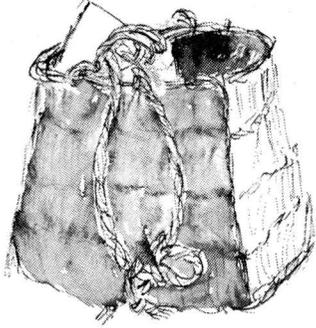
中国の登山界を統括しているのは中華全国体育総会の登山部門であったが、エベレストの第一、二次登山隊長をつとめた史占春氏は中国登山協会の負責人(責任者)だった。同協会は一九五八年設立されたことになっている。この日の出席者は史氏のほか、王富洲(第一次エベレスト登頂者)、劉大義(一九七七年トルム峰七四四三・八八七登山隊長)、陳尚仁の三氏。また女性として袁揚さん(一九五九年のムスタグ・アタ七五四六、一九六一年コングル・チュウビエ・ダグ七五九五各登山隊のリーダー)、潘多さん(コングル・チュウビエ・タグ、一九七五年エベレスト登頂者)の計六人であった。

皆さん素晴らしい人ばかりで、山を愛し自然を愛する人たちに国境はないと思っ。置かれた体制

山をきれいに コミは持ち帰ろう

の違いはあるが、人間らしさというものをつきつめた場合、皆同じであることを痛感、だからこそ、私は合同登山は可能であると信ずる。ただ登山の背景が違ふということを考えなければならぬ。日本人なら「個人が登りたいから登る」。中国は「登らなければならぬから登る」という国家的な使命感がある。だからポールを運び上げ、道路がなければなん人も動員して作る。また科学調査を併行させている。またわれわれ日本人は、シエルバと雇傭関係のうえで登山を遂行するが、中国はみんな一緒にやる。支配者意識はない。こうした違いを批判する考えはなく、それぞれの事情でやったらいので、合同ということになればこういう点を研究、調整しなければならぬだろう。

中国は建国三十周年を明後年に控え、K2(中国名チャオゴリ峰)などを目指しており、この資料を希望しているのを送ることを約束しておいた。こういうような資料交換、あるいは映画、人的交流など、できることからやっていきたい。この会合では、双方とも交流はいつかは果さなければならぬとする雰囲気があった。しかし、登山ということになれば、すぐ実現するにはいろいろの障害があると思う。長い時間の交流の積み重ねを経なければならぬだろう。



秋後の民具

前田義徳団長(日本放送協会名誉顧問、日本体操協会会長)は中国のオリンピック開催を強く要望されていた。国際オリンピック委員会加盟の問題もあるにしろ、その時機は加速度的に早まる感を感じた。登山もそれに平行性をもって行われるのではないかと。日本山岳会としては台湾との交流は避けなければならない。個人的な山行なら構わないが、二つの中国を認める行為は慎まなければ

ばならない。上海の体育館は、中国国内各省の部屋を設けていたが、そのなかに台湾もあった。省としては認めているという事だ。ともかく東欧旅行と比較してみても、同じ共産圏でありながら大きな違いがあり、今回の訪中の全行程中不愉快なことは一度もなく、気持ちいい旅ができた。中国の人たちの厚情に感謝したい。(本稿は西堀氏の談話をもとに片山全平氏に構成していただいたものです)

中国スポーツ界も最近とみに交流への傾斜を増して来たように受け取れる。折しも訪中された西堀会長は、中国登山界の代表者と会見する機会(別項参照)に恵まれ、今後両国の登山界の接触は頻度を増すことになろう。これを機会に中国の登山界をふり返ってみたい。

中国の登山史は一九四九年の解放後に始まる。当初はソ連との交流のなから、その指導を得ていた。しかし、第二次エベレスト登頂時の中国通信が報じた「中国の登山について」によると、「一九五六年中華全国体育総会の組織した三十四人の登山隊が陝西省の秦嶺山脈の主峰太白山(四一三〇m)に登頂して中国の登山スポーツの新しい頁を開いた」とある。しかしこの場合、やはりソ連二人が含まれており、まだ独自の道は歩んでなかった。それ以前の揺籃期では、中ソの「密月登山」がしばしば行われており、その期間は中華全国总工会(労働者の全国的組織)が他のスポーツとともに登山部門を設け、主にパミールで合同のかたちで活動を展開していた。しかし中ソ間に亀裂が入った一九五

中国登山界の沿革と現状(上)

片山全平



九年ころから、中国は独自の登山活動に踏み切った。中国建国十周年を記念する中ソ合同の北極ルートからのエベレスト登山計画も、ソ連は偵察隊まで出しながら沙汰やみとなった。そのまへの一九五八年には中国登山家協会が設立され、北京地質学院が本格的に登山を学内に取り入れて、中国登山界のインシアタイプを取った。中国の広大な地図上の空白部の調査、あるいは資源開発にも欠かせない学術的解明が登山活動と併走する発想からのものと思える。以後エベレスト第一次(一九六〇年)、第二次(一九七五年)の登頂につながるのだが、以下「中国登山の歩み」をまとめておきたい。切り抜き帳的であり、資料もれもあり諸先輩の教示を仰ぎたい。なお、初期の段階は『山岳事典』(山と溪谷社、大曾根純)を参考に、また山名、緯、経度は西堀会長がもたらされたものである。

一九五五年六月全ソ労組中央理事会の招きを受けて、中華全国总工会は四人の登山家を派遣ソ連の一流登山家十三人と合流、パミールの十月峰(六七〇〇m)に登頂、さらに団結峰(六七七三m)の初登頂に成功した。この登山の前段階ではコーカサスでの高度順化も行っており、本格的な指導がなされたようだ。

この翌年の四月二十五日、太白山(太乙山ともいう)の集団初登頂に成功した。隊員三十四人で、このうち前述のようにソ連登山家二人、カメラマン二人、体育学院運動生理研究生二人が含まれている。日本山岳会会報一九一号によ

K2登山を終えて

広島 三 朗

「四年間長かったけど、K2やって良かったよ」というのが、過日放映されたテレビのドキュメンタリー『K2登頂、一〇六日の群像』の僕の最後の言葉だったようだ。たしかに四年間の準備は長かったし、これまでに大きな登山隊の準備の経験がなかったで、いろいろと試行錯誤の連続で、いまになると、なぜ最初からあすこへ話を持って行かなかったとか、あすこや自分で自身に対して腹立たしくなることさえある。もうK2のような大規模な登山隊は出ないかもしれないが、その準備は僕達の経験からすれば、もう登山の範疇からは遠い、社会事業でも始めるようなものだったと言えるだろう。

今から考えると、以前のエヴェレスト隊の準備の折などに、装備や食糧の調達や用具の改良などについてはその苦労がふれられていたが、それ以前の準備についてはほとんどなく、K2の準備をやってみて、初めていろいろな苦労があることがわかった。新員勲隊長の苦労は僕の比ではなかったし、中央の登山界にはなじみが薄いにもかかわらず、そのために起る妨害や、非協力を乗り切って出発までこぎつけたのは、やはり九州男児の底力であったのだろう。ただ僕達の事前の段取りの拙劣さや、未熟なこともあったが、正直に言う登山界の中で足の引張り合いもあつたわけで、その意味からすると、もっと日本の登山界が大人にならなければならないと思つたわけである。

五月に日本を出発し、難問題とされていたスカルドからのキャラバンは無事に済み、六月中旬にK2の麓にベースキャンプを建設したが、僕は第一次のキャラバンリーダーとして、二七〇人のポーターとともにバルトロ氷河を歩いてみて、ネパールでの二回のキャラバンの経験を含めても、今回ほど楽しいキャラバンはなかった。それは第一次キャラバンのポーターの大半が、スカルド、カプルーなどの者で、バルトロに入った経験のない者が多く、僕等がポーターに対して指導的な立場に立てたし、今回のキャラバン如何で、彼等スカルドやカプルーの者がバルトロに入る機会を得られると考えたためか、早朝に出発していつも昼にはキャンプサイトに着いてい

ると二頂上を仰いで一息入れた。そしていよいよ最後のアタック、午前十一時十五分全員遂に太白山の最高点に到達した。……われわれは期せずして万歳を叫び、野獣を防ぐため携行した十挺のカービン銃をいっせいに連続三発、大空に向けて発射し祝賀した(古市美津雄)とある。ともかく中国登山界では画期的な成果であった。

この二カ月後、このなかの隊員十二人が選ばれ、ムスタグ・アタ(慕士塔格)氷山の父、七五四呎、N35度50分、E80度30分、新疆省)登山がソ連との合同で行われ、七月三十一日、三十一人という大集団登頂が行われた。中国側メンバーには史占春がその隊長として指揮をとった。この隊はさらにクングール九別山(公格原九別山、七五九五呎、N38度、E58度10分、新疆省)に二人の中国隊員と六人のソ連隊員が八月十六日初登頂した。

一九五七年ミニヤ・コン・カ(貢嘎山)山中の王、七五九〇呎、N29度40分、E102度、四川省)に史占春隊長のもと登頂に成功した。中国隊独自の登山だったが、丁行友(北京農業大気象学科助手)が雪崩で、また師秀、彭仲穆、国徳存が登頂後滑落死する中国初の遭難事故を起こしている。

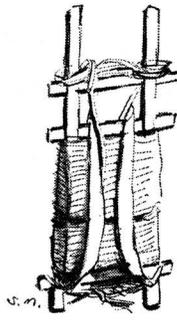
中国隊が集団登山の形式をとるのは団結、組織力を意識した登山であるからかも知れない。極地法による特定の隊員のみが頂上を踏むという形態は極力避け、全員登頂の成果を期待していることと思われるが、そのことが遭難に関連することもあり得るのだ。

こうした遭難が契機となったかどうか、一九五八年六月二十日北京で『中国登山家協会』が誕生した。全国アマチュア登山家の組織として出来たもので、同協会の会員には有名な登山家のほか、地球物理学、地理学、気象学、医学、動物学、スポーツなど各方面の専門家が名を連ねている。活動方針は各国との友好関係の発展を目指すこと、また五カ年計画が採択され、大衆性のある「百回登山運動」が展開される。このほかヒュッテの増設、高山科学研究所、登山家の養成をあげている。これが今日の中国の登山界の基盤を作ったものと思われる。現在史占春は中国登山家協会の責任者であるが、発足当時は中国登山家協会となっていた。恐らく同一のものと思われる。いずれにしても中国が学術調査も行い、自然の解明をも合わせて行い科学陣の動員が登山のなかに組み込まれたのである。

一九五八年八月、五人の若い女性がレーニン峰(七一三四呎)に向かった。女性の登頂はならなかったが六九〇〇呎に達している。そのメンバーに袁揚(北京地質学院卒、当時二十三歳)、周王瑛(製図員、当時二十一歳)らに加わっていた。袁揚は今回、西堀会長との懇談会にもおんだ人だが、初期のころから登山活動を行っており、その後の女性登山にはリーダーとなつて活躍する。またこの年の十二月二十日には、北京地質学院だけのグループが祁連山脈の「七一〇」氷川主峰(五一二五呎、甘肅省)に登った。この山はすでに中華全国総工会の登山隊が初登頂しており、今回は同学院の教師、学生計五十四人で編成、このうち十二人が女性であった。そして地理、鉱物資源の調査も行われたが、同地域の二万五千分の一の地図も作製されている。このころから中国登山の主流は北京地質学院の人たちによって占められるようになった。次回は北京地質学院の活動状況、および女性登山家の養成について述べたい。

(以下次号)

た。
夜はいつも火を燃して一緒にダンスに興じたり、歌を唄ったり、悪名高きバルティ・ポーターも僕等の接し方によって変わったのかもしれないが、こんなに気の合う連中は他にはなかった。規則通りに靴や雨具などを与え、もちろん給料は規則通り、ただ一次キャンプだけはウルドカス以上で雪が出てきて、コンコルディア付近では五〇センチぐらいの雪もあったので、ベースキャンプまで来たポーターには、本当にお礼の意味を込めてポータスを一人二〇ルピー手渡してやっただけであった。



第一次キャラバンに遅れて一週間後に、吉沢一郎総指揮がB・Cに到着したが、七三歳の年令にもかかわらずバルトロ街道を通って来たことに對して、驚きとともに敬意を表したかった。僕が一九七五年にK2の偵察で入った時に、現役の山岳部の学生が途中で音をあげているのだから、いかに長い苦しい旅であるかを察していたのだ。ただ僕は出発前に健康診断をした医師から、吉沢さんが標高五〇〇〇メートルのB・Cへ行ったら危険だし、確実に寿命を縮

める原因になると言われていたので吉沢さんのB・C入りには反対していた。しかし新員隊長は良くその辺を判断したものだと思われ、吉沢さん自身のご苦労は大変なものだったと思うわけである。

登攀は前半の予想外の好天、六月中旬から一カ月間、悪天による停滞は一日もなしという条件に恵まれて困難と考えられていたアブルチ稜の岩壁部のルート工作が順調に進んだ。これまでのイタリヤ隊やアメリカ隊の記録で、非常に苦労していた所も、大して苦労もなくルート工作ができたのは、初登頂後の二十三年間の登山技術の大きな進歩がものを言ったのだろう。用具も然り、山の見方、例えば岩壁の登り方や氷壁の登り方も然りである。

そして今回はそれにもまして、登山期間中にベースキャンプに張りついて、人間コンピューターとして登攀隊員三十二名を一つの狂いもなく動かしていた登攀担当の原田達也副隊長の力があつたことが大きな要因であった。

八月八日に三名、九日に四名このうち一名はベキスタン山岳会から参加したアシユラフ・アマーン計七名がK2の頂上に立つことができた。八月四日と十日にそれぞれアタックメンバーに指名されながら遂に天気に恵まれず、頂上に立てなかった者もいたが、それでも隊員のすべてが全力を尽して

K2に立ち向かったことが、登頂後のB・Cの雰囲気には漂っていたし、七九四〇メートルのC5まで三十二人中二十六人の登攀隊員が達していることでも、その一端がうかがわれるだろう。

北は北海道から南は九州まで、日本全国に散らばっている隊員の多くは日本山岳会の会員であり、会の催しなどに声をかけていただければ喜んで飛んでゆく、気軽な連中であることをつけ加えておきたい。

またK2登山にあたって、いろいろとお世話いただき御支援下さった方々に紙上をもって、お礼を申し上げる次第である。

海外トピックス

インド隊カンチエン
ジュンガ登頂

今年のプレモンズンにインド陸軍隊がシッキム側ゼム氷河經由カンチエンジュンガ主峰をめぐり、北東稜から主峰第2登を果したことは多くの方々がご存知のことと思います。隊及び登山の概略が、陸軍隊々員およびシエルパにより明らかにになりました。

なお先日、僕のところへ英國のクリス・ポニントンから手紙が来た。K2登頂を祝ってくれた内容で、キャラバンの方法や天候についての質問である。一所懸命で英文をやって返事を書いたが、彼らは七八年に小チーム(八人)で西稜からの登攀を計画している。同年はアメリカのホイテッカー隊も許可を取っており、これは北西稜だという。新ルートからのK2登頂はどうなることだろう。来年が楽しみである。

* * *

隊長ナギンダール・クマール大佐、副隊長フレム・チャンド少佐(登頂者。昨年日印ナンダ・デヴィ縦走隊々員)、S・S・シン他十五名(含医師)。ハイポーター、ネパール・シエルパ十五、ダーズリン・シエルパ六、マナリより六、計二十七名。アプローチはシリグリー、ガントク經由ラチェンまでは車を使用、徒歩四日でベースキャンプのグリーンレイク。以下各キャンプの高度。BC四六五〇m、ABC四八〇〇m、C1五五〇〇m、C2五九〇〇m、C3六三〇〇m、C4六八〇〇m、C5七四〇〇m、C6七七〇〇m、AC八〇〇〇m。今年の東部ヒマラヤは降雪が多く苦しめられたようで、

伊藤秀五郎

草原随想

カット坂本直行 定価二〇〇円
B6判三〇二頁 送料二〇〇円
昭和四十六年刊 残部若干

北大山岳部創設者のひとり、名著『北の山』の著者の、生物学者、教育者としての面目をつたえる珠玉の随筆集

新樹社

〒112 東京都文京区目台一-125五
電話 〇三(四)二二〇三
振替東京 〇一五五七一九

陸軍隊は登山の初期段階で隊員を一人失った。ルートは下部がかなり困難であった。頂上アタックは五月三十一日に行われ、ACより頂上まで登り十一時間、降り五時間。サミッターは前述のプレム・チャンドおよびネパールからのハイポーターであった。
昨年ナンダ・デヴィでパンジャブ(クルー・マナリ山域)より初めて外に出る機会を得たマナリ・ハイポーターは全員C5以上に達し、内二名は第二次登頂要員としてC6に待機するという大活躍をみせた。なお近々N・クマール隊長著になる報告書が出版されることである。(梶 正彦)



・自然保護情報・

原生林の北沢峠は守れるか

追いつめられた南アルプス

市川 一雄

北沢峠を通すか通さないかで六年越しの論議が続けられている南アルプス・スーパージョウ林道問題も、環境保全審議会の意見を聞いてうえて結着をつける方向へ動き出している。環境庁がどのような裁断を下すかは南アルプス国立公園の運命をきめることになるだろう。

南アルプス・スーパージョウ林道は、芦安(山梨県)から北沢峠を越えて戸台(長野県)を結ぶという構想のもとに、四十二年から工事が始められて、全長五七・六キロのうち、未施工部分は北沢峠をはさむ一・八キロを残すだけとなっているのだが、実は、北沢峠に車道を開けるか開けないかは、この国の環境保護政策の質を問われるほどの問題なのである。そして、北沢峠を守ってほしいという訴えには、これまで乱暴に進められてきた山岳観光自動車道路というものの根本的な見直しと、南アルプス山地を国民の休養地としてどう扱っていくのが正しいのか、という問いかけが含まれている。

三〇〇メートル級の高峰だけで十座を数え、日本最大の山岳地帯である南アルプスは、日本列島に数えるほどしかなくなってしまう

った原生林が存在するなど、原始景観をよく残している。とりわけ北沢峠一帯のシラビソ、オオシラビソなどの原生林は、日本の自然を代表する美林だといわれ、日本学術会議が特別決議をもってその保護を訴えた地域である。日本が世界に誇れる原生林といつてよい森林なのだ。だからこそ、国立公園の中でも最も厳重な保護が加えられる第一種特別地域とされているのだが、スーパージョウ林道は何と、その森林のまん中を貫いて建設されようとしているのである。信じられない事態である。

道路交通上、必要不可欠の道路というならいたし方ないのだが、環境保護の理念が確立されない、経済優先の異常な時代に構想された山岳観光道路によって、たぐいまれな原生林が犠牲にされてしまっているのはあまりに惜しい。それに、南アルプスを、これまでのような型の山岳観光地に墮落させずに、数少ない原始景観地を生かす真の国民的な自然休養地として、これからの時代にふさわしい自然公園利用のモデルを打ち立てるために、いたずらに車道を高山地帯へ導入することをやめ、新しいいき

方を考えなければならぬ。

また、構造山地である南アルプスは、いたるところに断層が走り地質もろく、大規模な自動車道路の建設にはそぐわない。現実スーパージョウ林道の建設によって、いたるところで目をおおいたくなるような大崩壊が起き、道路そのものも崩落するなど、山岳景観と自然林を著しく傷つけている。このように、建設と維持に金のかかる道路は、過疎対策どころか、財政的に過疎の村を追いつめるだけである。通りぬけ観光客のために自然地域を台無しにすることも、地元にとって得策ではない。むしろ原始景観を厳正保護し、そこにふさわしい休養施設を地元民の手で設け、そこに働く場を求めるところの方が、真の過疎対策になると思ふのである。

日本野鳥の会原富貴人氏の調査によれば、北沢峠付近では、これまでの林道開発によってオオアカゲラは姿を消し、コマドリやメボソムシキイはほぼ三分の一に、ルリビタキは半減してしまつたという。ニホンカモシカなどの大型獣も同じ運命をたどっているに違いない。南アルプスは追いつめられつつある。そうしたとき、南アルプスの心臓部といふべき北沢峠へ、もしスーパージョウ林道が貫通するようなことになれば、それは赤石山地全域への衝撃となつて、やがてはこの自然の聖域を荒廃へと導



自然保護委員会 東京集会 織内 信彦

くことになるだろう。

日本列島にわずかに残された原始景観地域を何とか子孫へ伝えるために、スーパージョウ林道の建設は廃棄されなければならないと思う。

自然保護委員会は、本会の数ある委員会のなかで、支部所属の同志をもつ会員と密接な連携のもとに運営されている点では数少ない委員会の一つであろう。

秋に東京集会をやるというところで、会場として選ばれたのが裏丹沢の長者舎山荘であった。

支部所属の会員と合同で集会をやったのは、今年度だけでも大台ヶ原山、上高地について三回目である。岩手、福島、越後、東海、関西等からも参加した出席者は、東京周辺の会員を含めて三十名を数え、毎度のことながら盛会であった。

会場として選んだ裏丹沢が、立地的にみて成功であったかどうかは別として、定刻の五時には、参参伍々集った会員で、懇談のため用意された部屋は早くも満席の盛況。

猪俣信市氏(越後支部)の解説

で、新潟県山のゴミ会議製作になる谷川岳、苗場山、飯豊山のトッキー映画を観賞、日本の山々が無思慮な登山者やハイカーによりいかに汚されているかをリアルに見せつけられて、考えさせる多くのものを一同に与えたのであった。

苗場山と飯豊山のみを例にとつても、去年の九月と今夏の七月の両回だけで、ヘリコプターの協力を受けたとはいえ山麓へおろしたゴミの量一〇トン、これがすべて新潟県山のゴミ会議に集まる延人員約八二〇人のボランティア活動によって行われたと聞いては、われわれのような総論派はただただ頭の下がる思いがしたのである。

国、県、市町村等が無策と言つてもよいような現状は、理窟ぬきにして、当局、登山者側共々に、山の汚染問題について、改めて検討すべき時機に来ているのではないかと、痛感させられたのであった。

そのあと全員が、鈴木担当理事の司会のもとにワン・ミニッツ・スピーチをやり、湯気のたつ鍋料理を囲みながら夜半におよぶまで懇談に過した。

翌朝八時からの報告会には、東海支部の小川務氏から、御在所岳北谷上流付近の谷川水の汚染状況について、恐るべき報告が行われた。

本年八月七日、同地域の六地点から採取したサンプルについて、

精密な水質検査、化学分析が行われたデータは、いずれ会報にも紹介されると思うから、ここでは省略するとして、六地点のうち三地点を除いて(この三地点は汚染源とみられる山上の施設との関係からは地形的に水脈を異にしている)いずれも、許容限度をはるかに越え、飲用すれば、吐き気を催したり、下痢を起すほど汚染度の高いことが検証され、驚くべきはそれとは知らない登山者が、この水を炊事に使用しているということである。

汚染源はなにかというと、御在所岳山上にある大規模な休憩場、ホテル等の諸施設であるということだ。

御在所岳だけではないと思う。山中至るところに、このような汚染の発生源をもたらした原因はなにかを考えてみる必要がある。

そもそもはケールプーカーとか、ロープウェイとかいった大量輸送施設であり、また山腹を傷つけて設けられる林道という名の隠れ蓐を着た、観光自動車道路の開通によるものである。そして、その結果、必然的に出来る大規模宿泊施設や休憩場の乱立にある。森林乱伐の問題は言うまでもなく、国や地方の行政当局に、自然環境を保全すべき確固たる姿勢が今日より強く望まれるときはないと思う。

出席者が交々発言した結論ともいべきものを要約すれば、以上

のようなことに尽きるのであった。

報告会を終えて、参会者の約半数が秋晴れの犬越路へ往復した。往路眼についたゴミは、有志の達人がこれを片づけて行ったのだが、同じ道の帰路には、早くも新しい投げ捨ての弁当がらや果物の皮などが散乱しているのはただもうあきれるのほかはなかった。十月十五、十六日、裏丹沢長者舎山荘にて。

出席者 高橋亭夫(岩手)、武藤清次(福島)、猪俣信市、藤田力夫、鈴木義男(以上越後)、田村聡明(関西)、小川務(東海)、以下東京、渡辺公平、島田巽、大野俊夫、中村純二、宇野佐夫妻、国見利夫夫妻、山本良三、武田満子、渡辺正臣、池田智津子、鈴木邦之、折井健一、森川洋祐、沢井政信夫妻、小原俊、加藤隆、小牧秀剛、伊藤周左衛門、織内信彦



丹後保護委員会
参加して
高橋亭夫
岩手支部

私は、初めて自然保護委員会の集會に参加しましたが、私なりに二、三の点について感想を申し上げます。本部の方々が全員参加の予定で

ありましたが、板倉勝正先生が親戚に御不幸が生じ参加出来なくなり、新宿駅の西口で、私は先生と初めてお会いしましたが、事情を説明していただき、差し入れをいただきました。

このように板倉先生以外は、特別参加者も含め全員に近い人達が参加できたことは、すばらしいことだと思えました。また若輩の私が大先輩の方々とお話し出来たことは大きな成果でありました。

次に、地方の人達は私も含めて七名であり、少ない感じはしましたが、しかし多忙にもかかわらず、地方から自費で上京して来るためには仕方がないと思えました。今後は、本委員会が強化され、せめて足代金が支給されるようになり、何日間か討議を行い、次に現状を視察して活動に入るようになれば、当然参加者も多くなると思えますし、また足代が出なくてもそのようにしなければならぬと思えます。

討議の内容ですが、越後支部の猪俣さんを始め一部の人達が「新潟県のゴミ会議」を結成し、約千名の会員と共に同じ山仲間からまで批判されながら、着実に初期の目的に貢進していることは、まったく敬服の一語に尽きます。心ない他人の捨てたゴミを、自費で何回も計画通りに進めている行動は、言葉で表わしても実際に行うのは大変なことであり、これこそ

が真の心の美だと思えます。この輪が一日も早く全国に広がることを望みます。そして、このような会が必要ない自然を一日も早く実現したいと思えます。

六日目の討議の中で、東海支部の人達が行った、御在所岳北谷の水質調査の報告は、今後岩手にも中央観光資本が、かなりの観光地を買収し占めているので、新幹線の開通時には、このようなホテルが出来上り、水質汚濁の問題が生じると思うので、事前に貴重な教訓となり参考になりました。

私は、丹沢は初めてであり、秋

●図書紹介

『旅の山菜』

片岡博著

本会きっての山菜通である著者の『山菜記』、『続山菜記』につづく新著で、六年ぶりの出版ということである。内容は二部に分かれて、書名となった「旅の山菜」と毎日新聞に連載された「山菜を食べる愉しみ」とが含まれている。九州で育った著者にとって、精力的な芽生えを見せる春先の山菜は、大変な驚きであって、旅に出るたびに何かの山菜との触れ合いを楽しむようになったと「あとがき」に記されている。そのような旅は北は北海道からはじまって二十二県に及び、いろいろな環境、季節のなかでの山菜とのめぐり合

晴れの丹沢での一汗は、良き思い出となりました。特に、大先輩の島田巽先生が、コースの小さなガレ場を、カモシカのような身軽さで通る姿を拝見した時、心うたれるものを強く感じ、参加したことを喜びました。

最後に、本委員会が、今後ますます強化されわが国の自然保護運動の良きリーダーとなられるように、大先輩の皆様のお指導をお願いすると共に、今回御世話になった皆さん、特に池田さん、担当理事の鈴木さんには、厚く御礼申し上げます。

いが四十二篇も記されている。

早池峰山、酸ヶ湯、弥平四郎、奥只見、木曾駒、大峰山等々、山懐ふかく入りこむ山菜行もあれば、日帰りの都市近郊の採集記もあるが、「旅の山菜」では、いつも旅の話が先に出てきて、さて今度はどんな山菜の話かなと、サスペンスを抱かせたり、ときにはうまく落ちがついていたりする。なにしる山菜に慣れた著者が心底から楽しんでるのだから、読む側もその気分に入り入れられ、山菜までご馳走になったような気になつてしまう。こなれた文章のせいでもある。

第二部の方は、二十二種の山菜について、「山菜らしい食べ方」について具体的に記されているが、単なる料理法の伝授ではなく

この方にも、風土、民俗、季節なども味つけに加えられて、楽しい読みものとなっている。

この著者が「それにつけても気になるのは、最近の山菜ブームとかによる、心ない人々の無神経な自然破壊ぶりである」と心を傷めている一節は、読みすくしてはな

るまい。装幀は著者の義兄にあたる猪熊弦一郎画伯。

A5判変型二一八頁 一五〇〇円

昭和三十二年一月一日 実業之日本社刊 (島田 巽)

『アルプス事典』
(Lexikon der Alpen/Toni Heibel)

トニー・ヒーベラーといえ、アイガー北壁やチヴェッタ北西壁などの冬季初登攀者として著名で、数多くの山岳書の編著者としても知られる。オーストリア生れで、ドイツのミュンヘンに住むこのヒーベラーが中心となり、ドイツ、オーストリア、スイスの岳人や研究者たちの協力をえて、このほど『アルプス事典』が刊行された。B5版、四三二頁の、美しく、ずっしりとした重畳感をもつ内容豊かな事典である。

一口にアルプスといっても、東西に千二百キロのひろがりをもち、西はフランスから東はユーゴスラヴィアとオーストリアに及ぶ広大な地域だが、そのアルプスの

登山史、研究史に欠かせない人名が網羅され、地名については山岳ばかりでなく、谷や川も見出し語となっている。さらに山岳地形や登山具などの用語、衣食住の民俗風習にも及んでいて、アルプス百科事典の名にふさわしい。

アルプス登山史における重要な発行の年表、四千メートル峰一覧表、峠の一覧表、主要河川と湖の表などは便利この上ない。聖ポニファティウスは、ビール醸造者と仕立屋の守護者で、使徒ヨハネスは画家や出版業者の守護者といった

たぐいの、アルプス山岳地方の守護聖人の一覧表はほほえましい。日本人もこの事典に登場している。「ビヴァーク」の項では、一九六九年のアイガー北壁冬季登攀を成功させた日本人隊が、「無敵のハーケン」で確保すれば、このよ

うに割合らくにビヴァークできるといって説明文つきで半頁大の写真となって刷られている。「女性登山」の項では同じ年の夏に同じくアイガー北壁を登った日本人グループ六人の写真がこままた幅をきかせていて、「女医ミチコ・

わたしたちのルームをわたしたちの手で!!

ルーム募金の報告とお願い

募金委員長

ルーム基金募集の申込期限十月末日現在の結果は、

東京 三九三名 八二六・七〇円
八、二六七、〇〇〇円
地方 三七三名 八五八・七〇円
四、二九三、六〇〇円
合計 七六六名
一、二、五六〇、六〇〇円

となり、目標額の一千万円を達成することができました。ご協力いただいた会員各位に対し、ここに衷心より厚く御礼申し上げます。

目下法人関係の募金に全力を投入していますが、経済界不況の折から難航をつけております。またルーム及び図書室利用度の高い東京地区会員の応募人数が、いささか少ない点もありますので締切り日をさらに明五

月末日現在の結果は、

東京 三九三名 八二六・七〇円
八、二六七、〇〇〇円
地方 三七三名 八五八・七〇円
四、二九三、六〇〇円
合計 七六六名
一、二、五六〇、六〇〇円

となり、目標額の一千万円を達成することができました。ご協力いただいた会員各位に対し、ここに衷心より厚く御礼申し上げます。

目下法人関係の募金に全力を投入していますが、経済界不況の折から難航をつけております。またルーム及び図書室利用度の高い東京地区会員の応募人数が、いささか少ない点もありますので締切り日をさらに明五

山岳部、高橋千鶴子、山里寿男、松丸秀夫、嵯峨野宏、加治甚吾(一)丸橋哲也、岸栄、島尾久子、島尾智恵子、榎本進、野上成男、江川利雄、山崎健、加藤節子、平井和雄、広島三朗、川瀬幹夫、村岡利夫、和久井正明、水野勉、小川武、渡辺照人、角田不二、早川瑠璃子、浜岡透、友野正雄、矢口陽一、宮沢章、吉田禮二、増田洋子、矢部達雄、平山善吉、和田民子、桜井善志、野田憲一郎、関塚昌孝、桜原正明、千葉保之、居亮、川崎精雄、明治学院大学山岳部、広羽清、小花朋子、仲徳二、片桐盛之助、尾崎千代一、佐藤裕、中林愛三、亀谷外毅雄、関本一男、岡田儀宣、佐藤淑男、松家晋、浅原重継、竹節作太、大野義徳、小倉由美子、小沢明夫、井古田忠男、清水春美、黒沢通子、岩永信雄、鈴木昭、渡辺兵力(追加分)

藤浩幸、吉田満、宗実二郎・慶子、山口亮、清水佐二郎、木村郁夫、新妻、兼平治水、高橋長助、横田春雄、蒲生明登、須沢春雄、百瀬寿雄、陸田峠郎、平田恒雄、八幡浩(一)岡村憲、広瀬貞雄、荻野恭一、高本孝、江藤秀一、甘利敬直、江越千代子、滝本幸夫、山本吉之助、吉田美智子、前田武治、小島一喜、遠藤昭治、福田光子、相模八郎、工藤文昭、堀等、村上明、野村俊男、川端信治、宮後正樹、鼎田中、松島静吾、水橋忠司、井上晃、田中弘美、赤羽孝一郎、金光義明、小本曾章男、井口謙司、中野和郎、金子丞二、知久健四郎、松葉明、山田猛、小島守夫、稲垣一郎、須賀太郎、吉田初太郎、齋藤喜一、川崎泰男、辻井達一、堀口丈夫、広瀬正弘、永高賢、吉野禎造、岡本丈下、吾妻山の会代表河上鏡治(0.4)本治美、保科文人、塚田和男

ルーム基金応募者

ご芳名(5)

(昭和52年11月9日現在 敬称略・順不同)

〔東京の部〕一口一万円 数字は口数
(10) 山口健児(5) 山崎安治、金坂一郎、山本良三、田辺主計、北里大学山岳会同山岳部、武田直子(故武田久吉氏夫人)、織内信彦(追加分)、(3) 橋本 正、高木勝治郎(故高木伊八氏実弟)、河村栄一、網蔵志朗、加藤恭平、石川治郎、吉田久兵衛、野萩守、中川武(2)、牧野内昭武、大倉昌生、渡辺正臣、坂本正智、錦織保清、勝田房治、田村協子、三枝礼子、山口清秀、日立中研

〔地方の部〕一口五千円 数字は口数
(20) 今西錦司(10) 片山英一、織田取、佐藤和志(8) 山野野武夫(5) 笠原藤七(4) 高野洋志雄、渡辺徳、奥原教永(2) 匿名氏、仲西政一郎、辻井秀一、田辺恵造、佐

小計 一六五・四〇円
金 八二七、〇〇〇円
累計 金四、五二八、五〇〇円
今回の計 金二、四三七、〇〇〇円
累計 金一三、二〇五、五〇〇円
申込人員 東京 四一六名
地方 三九三名

「マイ」の存在を強調している。スイスのガイド、フリッツ・アマターの項をみれば、日本人「Y・マキ」の名が見出される。

この「アルプス事典」は、同時に山岳関係語のドイツ語辞典という一面をあわせもっている。ドイツ語を読解する素養をもつ者にとって、これはたいそううれしい事典であり辞典でもある。

Lexikon der Alpen. Toni Hiebeler. Bertelsmann Lexikon-Verlag, Gutersloh 1977. (風と聲III)

『飛翔』

関田 美智子 著

昨年五月、穂高で亡くなった著者の遺稿集である。

序文を吉沢一郎氏が書き、高校一年から三年までの日記が第一章、東京学芸大山岳部時代の日記と山日記が第二章、エーデルワイス・クラブ時代のネパールの旅、南米

上高地山研だより

報告

新雪に薄化粧された山々に別れを告げ、山研は十一月六日(日)閉所いたしました。

この半年、山研の管理と利用者のお世話をしてくださった津村夫妻も元気で山を下りました。津村

アンデス・ワイナ・ポトシ登頂が第三章、山岳同人凌雲会時代の中央ネパール踏査、マッキンレー・ウエスタン・リブ遠征、日本女性マナスル登山隊が第四章と分けられ、解説、遭難記録、追悼、資料(履歴と山行歴、論文)が添えられ、遺稿集としてよくまとめられて編集者の苦心と、故人への哀惜の念がしんみりと伝わってくる。

彼女の亡くなる一週間ほど前、図書委員会のメンバーと三日間続けて夜遅くまでお酒を飲んだことが、いま夢のように思い出される。K2隊にもし参加していたらというようなことを考えると、惜しい人を失ってしまったといまさらのように思う。

昭和五十二年九月発行、三一四ページ、写真九枚、頒価千八百円、希望者は横須賀市武一―二六一―一山田靖子あて申し込めばよい。(山崎安治)

報告とお知らせ

夫妻、ほんとうにご苦労さまでした。

おかげさまで年々利用者も増え、目標額の百三十万円を突破しましたので、山研運営費だけはまかなえるようになりました。やっと見通しがつきましたので、来年度は、前々から御希望のありました五月連休時の開所を考えてみたと思います。ただし五年目に入

・図書受入報告(3)

図書委員会



出版社寄贈単行本(昭和50・7～52・7)

- 51) 白旗史朗著『名峰シリーズ5・尾瀬』山と溪谷社 昭51
- 52) 新妻喜永/写真『名峰シリーズ6・八ヶ岳』山と溪谷社 昭51
- 53) 水越武/写真『名峰シリーズ7・白馬岳』山と溪谷社 昭51
- 54) 志賀芳彦/写真『名峰シリーズ8・大雪山』山と溪谷社 昭51
- 55) 増永勉男著『霧の谷II』北陸通信社 昭51
- 56) 川村博道著『素人先生』同上記念刊行会 昭50
- 57・58) 志賀重昂著『日本風景論・上』『同・下』講談社 昭51
- 59) 米田幸雄編『Bokka 登山部創設60年記念号』大阪府立天王寺高校 昭51
- 60) 渡辺文仁編『カンジェラルワ初登頂―1973年カンジロバ・ヒマール遠征報告書』日本ヒマラヤ協会 昭51
- 61) 伊藤満編『インドヒマラヤのすべて―第6回東日本ヒマラヤ研究会報告書』日本ヒマラヤ協会 昭51
- 62) 鳥取県山岳協会10周年記念誌委員会編『鳥取県山岳協会10周年記念誌』鳥取県山岳協会 昭51
- 63) 坂倉登喜子著『エーデルワイスの詩』茗溪堂 昭51
- 64) 坂本直行著『わたしの草と木の絵本』茗溪堂 昭51
- 65) 山下政一著『シュルパの履歴書』日本ヒマラヤ協会 昭51
- 66) 伊藤秀五郎『北の山・続篇』茗溪堂 昭51
- 67) 川崎精雄著『山を見る日』茗溪堂 昭52
- 68) 山と溪谷社編『日本アルプス特選100コース』山と溪谷社 昭52
- 69) 二階堂匡一郎著『吾妻小屋日記』吾妻小屋日記出版委員会 昭52
- 70) サムエール・ブラヴァン著 井手貞夫訳『グリーンデルヴァ

ルトの山案内人』茗溪堂 昭52

- 71) クリスマン・ボニントン著 大浦莞生・平林克敏訳『エベレスト南西壁―英国隊初登頂の記録』集英社 昭52
- 72) 伊藤秀五郎著『詩集・山の風物誌』茗溪堂 昭52
- 73) ロベール・バラゴ、リュシヤン・ベラルディニ著 小野尚俊訳『ザイル仲間の20年』森林書房 昭52
- 74) 千葉県山岳連盟編『房総の山』多田屋 昭52
- 75) 渡辺公平著『山あればこそ』日本交通公社 昭52
- 76) 飯田睦治郎著『山の天気を知る法』東京新聞社 昭52
- 77) 白旗史朗著『山岳写真テクニック』山と溪谷社 昭52
- 78・79) 日本山岳会編『登山技術・上』『同・下』白水社 昭52
- 80) 河野昭一・橋本竹二郎著『立山路の花しるべ』巧玄出版 昭52
- 81) 佐伯立光著『立山路の歴史あるき』巧玄出版 昭52
- 82) 藤岡和夫・大屋厚夫著『蝶・野外ハンドブック2』山と溪谷社 昭52
- 83) 岩後会編『ナイロンザイル事件報告書』岩後会 昭52
- 84) 相内武千雄著『相内武千雄遺稿抄』同上刊行会 昭51
- 85) 神谷恭著『低山高蹠・遺稿と追悼』茗溪堂 昭51

(山県登氏寄贈本)

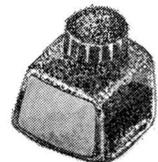
東北大学山の会編『蔵王―自然と人間1』大日本図書 昭50

(武田家寄贈本)

武田久吉著『高山植物写真図集』梓書房 昭6

(中華書店寄贈本)

『世界の最高峰チョモランマ峰の登頂に再び成功』昭50『チベットの新しい姿』昭49『黄河流域を行く』昭50 外文出版社



● 51年度・52年度利用者対比(9月より閉所まで)

	51年度	52年度
9月	45名(会員 11名)	130名(会員 61名)
10月	115名(# 39名)	121名(# 41名)
11月	7名(# 7名)	34名(# 16名)
開所より閉所までの利用者数		
	635名(会員 212名)	810名(会員 276名)

りますので、設備の修理、その他運営費もかさむことなど考えますと、やはり皆さまのご協力なくては、健全財政も不可能です。いっそのご協力をお願いいたします。

山研は会員皆さまのものです。楽しい雰囲気づくりに参加してください。

山研へ備品、図書をご寄贈くださいました会員の皆さまに、誌上をおかりしてお礼申し上げます。

(山研運営委員会・小倉)

報告

第三六〇回小集會

写真教室

手軽で誰もが楽しめる写真、スナップから本格的な山岳写真まで近ごろではカメラを持って山に登ることはごく当り前のことになっています。昨年九月のスケッチ教

室と同様の主旨で本年は写真教室を企画することになりました。「南アルプス」など多数の写真集を出しておられる白旗史朗氏を講師に、勉強会、写真撮影を目的とする現地山行、生徒の皆さんの作品に対してアドヴァイスをいただく批評会との三回シリーズです。一回目の勉強会には三十名を越す熱心な皆さんの参加があり、日ごろ疑問の点をこの時ばかりと、ぜひ専門的な質問も出されておりました。現地山行ではチャーターした中型バスで夜叉神峠下まで安心して寝てゆき、ちよと夜明けの時間に峠にたちました。前夜の曇り空もカラリと晴れ上がり、思わずシャッターを切ることになりました。紅葉もその最後の美しさを迎えてくれました。批評会では自満の作品にそれぞれ「題名」を付け撮影の意図を明確にするという難しい課題がつけましたが、また一段と写真意欲をかきたてられたようです。

写真教室参加者は次の48名でした。

- 原田衛、岡田豊、佐藤佳年、須波敏行、池田吉春、鈴木光子、飯島勉、牧野義雄、三浦隆雄、小原晴子、中西章、富田美知子、菅野時子、坂本正智、北林嘉鶴子、桜井信雄、一条憲治、堀江節子、岩崎三郎、山下潔、金子心一、加藤忠克、増田洋子、松丸秀夫、中島良和、松家晋、山本稔、小松崎幸

子、吉田礼二、伊藤博夫、梶原康夫、平山武志、半谷明子、大内京子、南坂純治、山村正光、入沢郁夫、大久保清樹、小原俊、中川武、加藤隆、池田智津子、中沢光江、阪本伸一、新井陽一郎、児玉茂、小原勝郎

報告

「蚤の市」懇談会

第一回蚤の市は参加者一〇〇名バザー陳列品約六〇〇点、オークション品二〇点。十月二十九日(土)東京お茶の水、全電通会館でおこなわれた。

飲み放題のウイスキー、ビール、ジュース、そして金坂一郎夫人、国見利夫夫人の手づくりのオードブルやおつまみも盛りだくさん。グラスを傾け、なごやかな懇親会を兼ねた蚤の市は大好評のうちに終了いたしました。

第一回ということで出品物の勝手がわからず二の足を踏まれた方もおられたようですので、ここにバザー品、オークション品のご紹介をいたします。

バザー品

- 登山靴、アイゼン、あざらしのシール、ザック、旅行カバン、ゲートル、くつ下、なべ、やかん、衣料品(ズボン、セーター、上着、シャツ)、南極用防寒つなぎ、茶器、コップ、ヘルメット、ハーケン、カラビナ、サンングラス、とっ

売場ご案内

最新入荷及び好評の本・報告書

- 中ツクチュ・ピーク登山報告書(雪と岩の会) 2,200円
- 中パミール・山と草原(日本ヒマラヤ協会) 1,600円
- 中ダウラ・ヒマール遠征1965(愛知県山岳連盟) 2,500円
- 中シンギカンリ(東北大学カラコラム遠征実行委員会) 3,000円
- 中東京農業大学山岳部報告第3号 3,000円
- 中兵庫の山やま(神戸新聞出版センター) 960円
- 中奥那須・第四号(奥那須の自然を守る会々報) 100円
- 中あるむ雑記一もんだにゆ叢書6(阿部恒夫) 特製3,000円 並製1,500円
- 中いろいろばた・第56号(南会津山の会) 800円
- 中草木の話一秋・冬(宇都宮貞子) 900円
- 中快晴の山(織内信彦) 2,500円
- 山日記1978年版(日本山岳会編) 950円

茗溪堂

〈山の本の売場〉お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

くり、さかすき、スキー靴、スニーカー、猿の腰かけ、アイロン、水牛の角、だるまストープ、パネル写真、南極用防寒靴、ニッカーズボン、花びん、スキー板、シュラフザック、スキートレンカー、ネパールみやげ各種、南極の石、チタン製(ハーケン)、カラビナ、スクリューハーケン、山岳図書、画、カレンダール、壁かけ、ザイル、JAC手ぬぐい、民芸品、ネクタイ……等、約六〇〇点。

オークションの品

* マナスル遠征に使用したアイゼン 三田氏より、初めてアイゼンという物を手にし、机を斜めに立

てかけ、その上を歩いて「なる程、アイゼンとは便利な物だ」と感心した、という話などをご披露いただく。(二万円)

* 足立源一郎氏遺愛の酒器

島田巽氏より、土曜会によく顔を出された足立源一郎氏の想い出話を混じえ、酒器の由来を説明していただく。(五千円)

* 五大陸最高峰の頂上の石でつくった「ぐい飲み」

植村直己氏出品 島田巽氏より、植村氏がこのぐい飲みを作る時の苦勞話(伊奈久先生の所へ一週間程、弟子入りした……等)を公開される。

- (一万円)
- *カドタのピッケル(昭和十二年)
- 金坂一郎氏出品(一万二千元)
- *第三次マナスル隊、ベースキャンプ付近の押し花
- 小原勝郎氏出品(六千元)
- *ヒラリ氏がサインした神崎忠男氏のアマダブラムの絵
- 神崎忠男氏出品(一万円)
- *ジャワワサラサの染型(古物)
- 森谷虎彦氏出品(六千元)
- *中国仙山焼の花紋つぼ
- 小牧氏より、非常に珍しい花紋がでていたつぼ、非常にまれにしかできないため、国外輸出はしない。中国で五年前に四万円で購入しましたとの説明
- (一万六千元)
- *エベレスト頂上の石
- 加藤保男氏出品
- ヒラリ氏が同じ物をお守りとして持っているとのこと(四千元)
- *エベレスト南壁の石
- 深田良一氏出品(千円)
- *ジャヌー北壁の石
- 深田良一氏出品(千五百円)
- *ナンダ・デヴィ頂上の石
- 梶正彦氏出品(四百円)
- *ナンダ・デヴィC2の石
- 小原俊氏出品(三百円)
- *坂本直行氏の画(昭和二年の作)
- 初見一雄氏出品(一万円)
- *テンジンのサイン入り色紙
- 集委員会出品(千二百円)
- *酒とつくり(二十年、信州にて

購入とのこと)

三田幸夫氏出品(六千元)

*銅製、酒おかん道具

三田幸夫氏出品(五千元)

*八ミリ映写機

大倉昌身氏出品(六千元)

*昭和初期映写機(使用不可)

初見一男氏出品(五百円)

*本「高山深谷」初版

神谷恭平氏出品(二万円)

「私の宝物」展示品

織内信彦氏出品

佐藤久一朗氏の三部作(ウェストンのレリーフ・山靴・リュックサック)

坂倉登喜子氏出品

世界のエーデル・ワイスのブローチ、ペンダント

ご出品いただきました皆様、ご協力ありがとうございました。

今回の総売上げ

四四万一〇五円

出品者返却七割(寄付を除く)

二四万二四七〇円

会場費、懇談会費用その他、

一八万三二五〇円

ルーム基金 一万四三八五円

なお今回、蚤の市後の委員会において左記事項が決められました。

○参加者より「恒例として欲しい」、「来年度もぜひ」、「来年にそなえて出品物を用意する」：等の声が多いため、来年度も実施の方向をとる。

○このような企画は長期準備が必要のため、ただちに来年度「蚤

の市委員会」を発足、運営委員、実行委員は今年に引き続き次の通りです。

〈運営委員〉

望月達夫、折井健一、山崎安治、金坂一郎、近藤信行、小原晴子、宮下秀樹、神崎忠男

〈実行委員〉

中川武、加藤隆、池田智津子

○蚤の市、懇談会に対するご意見、ご希望等ございましたら委員宛と申し、お聞かせ下さい

(池田智津子)

報告

第十回山岳図書交換会

読書の秋恒例となった山岳図書交換会が十月二十二日(土)の午後、本会ルームで催されました。昭和四十三年以来、毎年欠かすことなく開催され、本年はその十回目にあたりました。係では十回を記念して「稀観本コーナー」、「百円コーナー」等の試みを含めて盛大に行いたいと準備を進め、島田巽、山崎安治、藤井運平、三田幸夫、小原晴子、斎藤直一(遺族)、田中栄蔵、山本健一郎各氏をはじめとして後記の方々から出品を戴きました。十回を記念して盛大に行うとの会報予告はやや羊頭狗肉気味ながら、昨年の本脈発掘(串田孫一氏よりの大量四百冊に及ぶ出品)を例外とする、和書二四三冊、洋書七一点、

雑誌類一七五点(約六百冊)は、「ほば例年なみかまたは例年よりやや多い」程度の集まりとなりました。

四十余名の参会を得た当日は、午後二時定刻に山崎委員長の開会の挨拶、山本良三委員の説明のあと希望図書への申込みが行われ、締切後ただちに伊藤博夫担当委員の進行で希望重複本の抽選へと移った。抽選は例年通り塗箸によるおみくじ方式で、参会者の九割近くを常連の方々が占めたこともあって抽選風景は熱気のもつたものとなった。途中当りくじの塗色を覚え連続して当てる人も出、当りくじの作り直しをするハプニング等もあり、いつもながらの楽しい抽選風景であった。本年の人気集中本は「カムチャツカ発見とベリリング探検」、「チベット潜行十年」の各七名と「JAC会報(バラ15部)」、「雲の上の道」、「シェルピカンリ登頂報告」、「もんだあにゆ叢書・山の画文集」、「Himalayan Journal III 1936」に各六名の申込みがあった。また入札本では、山崎安治氏出品の「Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps」が一万二千元で、島田巽氏出品の「山岳」小島烏水記念号(第四十四年第一号)の特装限定本が四万円、小原晴子氏出品の「山に描く」が一万円で、山本健一郎氏出品の「岳人(14号から30号)」が一万二千元でそれ

ぞれ落札された。

なお、欠本補充の好機と、ルームにない本十数冊(内訳は別途「図書受入報告」で)を優先的に購入した。

総売上げは、三万四三九〇円となり、例年通り本会及びルームにおのおの一割をご寄附していただいた。出品者各位に厚くお礼を申し上げます。

(滝川清)

△出品者▽島田巽、山崎安治、藤井運平、三田幸夫、小原晴子、斎藤直一(遺族)、田中栄蔵、山本健一郎、海野治良、大洞陽一、滝川清、松家晋、越田和男、千葉保之、伊藤文蔵、中川恵資、橋爪幸達、吉沢一郎、板倉勝正、孫慶錫、伊藤博夫、初見一雄、河野悠二、篠繁一、加藤隆、牧野文子、川崎精雄、山本良三、鈴木茂、和田一男、堀内章雄、織内信彦、望月達夫、山下深、岡沢祐吉(以上35名)

お知らせ

第21回山スキー技術講習生募集について

主催 指導委員会

これから本格的に積雪期のスキー登山を志す方を対象にした山スキー技術講習会を企画致しました。山スキーの基礎技術から始め、その応用として五竜岳遠見尾根のスキー登山を行います。講習生の山歴と山スキーの経験や希望

に従って班編成をし、講師にはヒマラヤをはじめ海外登山の体験者でスキー登山の経験豊富なメンバーを予定しております。要領は左記の通りです。懇親の意味を含めての講習会ですので男女を問わず参加して頂きたく御案内申し上げます。なお宿泊設備の都合で申し込み受付は三十名に限りましてので御了承下さい。(参加者多数の場合は先着順と致します。)

日程 昭和53年2月16日(木)～19日(日)

場所 鹿島槍国際スキー場及び遠見尾根(立教鹿島槍山荘泊)

行程 2月16日夜行出発
同17日朝立教鹿島槍山荘着、午前中仮眠及び準備午後基礎技術訓練、夕食後ミーティング
同18日遠見尾根スキー登山、夕食後懇談会
同19日午前中応用練習、午後下山(現地解散)

費用 会員一万二〇〇〇円、非会員一万三〇〇〇円、(宿泊費、消耗品費、保険料、食糧、懇談会費等含む。交通費各自負担)なお、申込み後の個人的理由での解約には費用を返却できない場合があります。

ます。
申し込み方法 日本山岳会事務局で電話にて受付けます。TEL 03(813)2286、電話受付後申込み書を送付します。受付締切は一月末日です。参加者説明会及び準備会 2月7日(火) (担当 桐生恒治) お知らせ

学生部年報第六号
学生部

学生部は、十二月下旬、茗溪堂のご協力を得て七二年以来五年ぶりに、年報第六号を発行します。今号では特に、現役(登る人)が、今後の部活動、山行を考える上での参考になり得るよう、特集として「大学山岳部の原点を探る」を組み、過去・現在の好山行記録八編を掲載してみました。他に、学生部海外登山報告では「ミヤール・ナラ」、「ドゥナギリ」を掲載し、若い登山者の海外登山の成果を発表しました。掲載内容の詳細は、左記のとおりです。会員諸兄姉のご一読をお願いいたします。

掲載内容
△巻頭言
「大学山岳部への提言」吉阪 隆正(早大山岳部々長)
△特集
「大学山岳部の原点を探る」第一部「滝谷」早大山岳部 第二部「ナンダ・コートの初登頂」

第三部「北鎌独標側稜より北穂高往復」日大山岳部
第四部「春の剣岳より西穂高」宮下秀樹(慶大山岳部)
第五部「宇奈月より西穂高へ」日大山岳部
第六部「利尻岳」芝工大山岳部
第七部「白馬岳名剣尾根」都立大山岳部
第八部「大タテガビンより八ツ峯」竹中昇(早大山岳部)
△学生部海外登山報告
「ミヤール・ナラ」(七三年)
「ドゥナギリ」(七六年)
△山の講座
「高層気象ノート」市川清見(気象庁予報官)
「黒部別山登山の歩み」学生部黒部研究会
△随想
「リーダー・シップについて」初見一雄(日大山岳部OB)
「危険と感覚」成川隆顕(早大山岳部OB)
「ハーケン」長谷川良典(明大山岳部OB)
「天邪鬼のヒマラヤ行」竹中昇(早大山岳部)
「彷徨」阿部吉秀(駒大山岳部)
△加盟団体積雪期山行記録
△学生部活動報告
△付記
「加盟団体住所録」
「学生部規約」

丹沢でイノシシを食べる会
好評を博した西丹沢の山小屋でイノシシをたべる会をまた開きます。昭和53年2月末から3月初旬の土曜・日曜を予定しています。日時その他の詳細は、2月中旬、山岳会ルームに掲示しますので、お誘いあわせのうえ、ご参加ください。 青年懇談会

寄付
上高地山岳研究所への援助として一、金一万円也
早稲田大学岳友会代表 林郁彦氏
一、電気こたつと電子ジャー 原田幹市氏

*新ルームへ移転のため、一月及び二月中は図書室を閉鎖しますのでご了承下さい。 図書委員会

今年も十二月号をお届けする時期になってしまいました。今年の山の収穫はいかがでしたでしょうか。年が明けると、日本山岳会は新しいルームへ移ります。会員諸兄姉のご多幸をお祈りいたします。よいお年を。 (編集係)

昭和五十二年十二月二十日発行
113 東京都文京区湯島一六一
利根川商事 御さくらビル

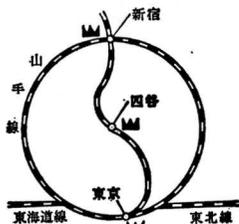
発行所 日本山岳会
社団法人
発行者 西堀栄三郎
編集代表 大森久雄
(813)二三八六(代表)
振替口座東京三三八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂
印刷所

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい
山の店
- 北へ来たら
山の店
- フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 65664
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番

なるべく なんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要るものがある。
なにしろ人間ですから
としこ豆山ですから

どうしても必要なものを
をこらえてみる
ま責任はもっています

かたるぐンテイ
でんや 281-8456
中央区八重洲4-1-1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

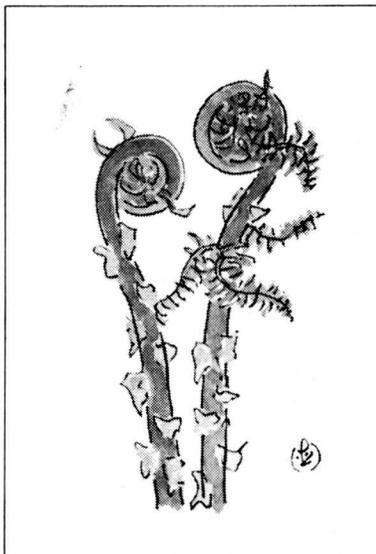
登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー一店
大阪店・北区曽根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 34440



山仲間へのプレゼントに!



おめした 絵はがき・1集

淡彩画絵はがき

▲北海道の山・原野・花▼坂本直行
1集・2集各6枚一組 三〇〇円
北のきびしい環境の中で描かれた
明るく美しい作品。親しい方への
お便りや手軽なプレゼントにどうぞ

山の本販売目録

一九七七年版(2集)茗溪堂編
B六判二三四頁 定価九五〇円
一般書店で入手可能な山と探検を
テーマとする本、約一千点を選んで
作成。本好きの方への贈物に最適

山日記

一九七八年版・日本山岳会
A六ボケツト判 定価九五〇円
古くから広い範囲の登山者に愛用
されている『山日記』は、山党同
志の洒落た贈物としても喜ばれて
います。プレゼントカード付
『山日記』の効用：織内信彦/装備
気象/医療/山小屋一覽/登山行
程表/交通機関連絡先一覽/難読
山名/日本三百名山/登山地図・
案内書/地形図一覽ほか